

IARU GSP 報告書

1. OXFORD GLOBAL LEADERSHIP PROGRAM 概要について

筆者は、今夏オックスフォード大学における IARU・GSP に参加した。

まず第一にその概要について述べる。

オックスフォード大学の IARU・GSP はかなり複雑なシステムをとっている。このプログラムは4つの要素からなっている。

a. オックスフォード大学の、**History, Politics & Society Summer School 2010** と合同で行う部分

本来、**History, Politics & Society Summer School 2010** は、90分×15回のレクチャーと2つのゼミからなる。(ゼミは複数から選べる)。

IARU・GSP では、このうち、レクチャー部分が含まれ、また、ゼミをひとつ選択する(今年度は、東ヨーロッパ・グローバルイゼーション・EUから選ぶことができた)。

b. IARU・GSP のオリジナル部分1

3回のエッセイの提出と、それに伴う3回のチュートリアルが存在する。(一人のチューターと二人の学生)

c. IARU・GSP のオリジナル部分2

最後の週に30分のプレゼンテーションを行う。(テーマは事前に割り当てられており、選ぶことはできない)

d. IARU・GSP のオリジナル部分3

90分×5回のレクチャーで、現代世界の科学に関する諸問題のイントロダクションの授業があった。(例えば、GS細胞)

結局のところ、90分×20回のレクチャーと4回のエッセイ提出(1. で選ぶゼミでも一本エッセイを提出する)、一回のプレゼンテーションということになる。

2. 学生との交流

授業の感想との関係で、先にこの点を記すと、IARUからの参加者は、東大2名・北京大1名・シンガポール大3名・コペンハーゲン大2名・チューリヒ工科大学1名・イェール大1名・バークリー大2名・オーストラリアナショナル大2名であった。

よって、14名中、5名がネイティブ・スピーカーであった。

ただし、食事などは、IARU生のみならず、同時期に行われていた **History, Politics & Society Summer School 2010** の参加者(ほとんどが社会人であり、主に、アメリカ人・オーストラリア人・中国人などがいたように記憶している。)や、**English Literature Summer School 2010** の参加者(こちらは英語教師や、英米文学専攻の学生が多かった。ヨーロッパ

各国・アメリカ・オーストラリアが中心)とも一緒であった(ただし、staircaseは、IARU生でちょうどひとつ使っていた)。そのため、IARU生以外の知己も増えた。(が、IARU生ともっとも親しくなった)

3. 授業の感想

aについては、政治・経済・国際関係論・法律と内容が多岐にわたっていた。自分の専門分野に近いものは比較的理解できたが、経済などは、専門用語も分からず、理解に支障があった。また、そもそも、こちらのプログラムは社会人向けのようなのである。

bについては、環境関連のエッセイ3本の執筆であったが、私はエッセイの執筆は初めてであった。しかし、エッセイの書き方などに関する説明などは何もなく、その結果、チュートリアルでは、「あなたはエッセイの書き方が分かっていない」などと言われることとなった。アジア系の学生への配慮がまったく存在していなかったといわざるをえない。もっとも、この点は来年改善するとのことであった。

cについては、非常におもしろく感じた。プレゼンテーションと質疑応答が30分ずつであった。

dも当初の予想に反して、おもしろかった。社会科学と科学の接点(例えば高齢化社会)などについての科学的立場からのイントロダクションであった。

4. その他

本プログラムは、上記のように分野横断的なプログラムである上、ネイティブ・スピーカーがかなり多い。そのため、専門用語への慣れなども求められるし、授業はネイティブ・スピーカーを想定して行われている感がある。よって、高度な英語力が求められるといえる。

また、他のIARU参加者は、単位認定が存在したり、全額奨学金でまかなっていたり、といった状況であった。例えば、オーストラリア国立大などは、数百名の応募があったという。本大学でも、グローバルな視野をもった人材の育成という観点からは、(ただでさえ、7月の試験期間に行われるのであるから)単位認定制度や奨学金の拡充が求められるだろう。(特に7月に試験の存在していない法学部において、単位認定に関して非常に消極的な姿勢が存在しているのは大きな問題であると信ずる)

個人的には、得たものの大きさとしては、第一に友人、第二に伝統ある大学での寮生活の体験、第三に授業内容であったと思う。授業内容の一番の不満点は、その中心をなしたエッセイについてであった。

IARU GSP 2010 報告書

薬学部 4 年

Oxford Global Leadership Programme

私がこの IARU について知ったのは、薬学部の教務から連絡をいただいた 3 年生の学年末のことだった。大学院試験を控えた 7 月ではあるが、1ヶ月間 **oxford** のサマープログラムに参加してみようと思ひ、この選択は本当に正しかったと今では確信をもって言える。

私が IARU に **apply** したのは、アメリカでの高校生活を終え日本に帰国してから大学 3 年生まで、英語に触れる機会が激減したのをなんとかかしたいと思ったのが事の発端だった。英語力の維持という観点だけでなく、英語の作り出す世界観にまた触れてみたいと思ったというところが大きい。日本では英語を使う機会はやはり依然として非常に少なく、日常的に英語を使わずとも生活が可能だ。しかし、一つの言語が作り出す価値観は限られており、視野を広げ、世界中のモチベーションにあふれた人々と出逢いたいという想いもとても強かった。

そして、今回 **oxford** での **global leadership programme** に参加し、レクチャー、エッセイやプロジェクトなどの課題、そして何より世界中からの友人との出会いがこの経験を豊かに色づけてくれた。価値観についても大きな影響を受け、日本の、特に教育において改善すべき点などにも新たに気づくことができた。

私が参加したプログラムは 14 人の世界中の生徒から成っていた。14 人の出身国はアメリカ、オーストラリア、シンガポール、デンマーク、スイス、中国、そして日本だ。私は東大では薬学部にも所属しているが、サイエンスを専攻している学生は私のほかに二人だけで (**environmental science** を学ぶスイスの学生と **engineering** を学ぶシンガポールの学生) 他の学生はみな政治、法律、国際関係、経済といった日本で言えばいわゆる「文系」の学生が中心だった。それでも、それぞれのバックグラウンドは多様性に富んでおり、それぞれの大学で学ぶことはみな異なり、お互いに刺激しあうことができたと感じる。私たちは 2 人の **nonresidential** の学生以外はみな同じ **staircase** に部屋をひとつずついただき 4 週間をともにすごした。Oxford では私たちの IARU のプログラム以外にも、**History, Politics, & Society**, そして **English Literature** というサマープログラムが同時進行していたのでそのプログラムに参加する人々と接する機会も豊富にあったが、やはり 1 ヶ月間同じ建物内に住むというのは IARU に参加した学生だけで、この 1 ヶ月家族のように過ごすことで本当に絆が深まったと思う。

前述のとおり私たちのほかにも二つのプログラムが同時進行していたが、特に **History, Politics, & Society (HPS)** のためのレクチャーは私たちも受講したので、彼らとは多くの授業をともに受ける形になった。こちらのプログラムは学生だけにとどまらず、世界中の社会人の参加者も多く、14 人という比較的小規模の IARU の参加者だけと学ぶよりもこのプログラムをより一層 **inspiring** にしてくれたと思う。また、**Continuing education** の海外での浸透をみて、学ぶ意欲を持ち続ける人の多さ、そしてそれに応える社会のシステムがあることに人々、社会の可能性を強く感じた。HPS のレクチャーは、大きい教室でパネラーがその日のトピックについてプレゼンテーションし、受講者の質問、意見をうけて議論をするというものと、10 名程度の少人数グループにわかれ、3 つのテーマにそって集中

した内容の講義、ディスカッションをするものの二つがあった。前者の大きなレクチャーのあとの質問は、質問をめぐる議論だけで1時間以上の時間を費やすことも珍しくなく、質問者がそれぞれ自分の知識と新たな知識を結び付けて質問したりコメントしたりする能力が非常に高いことや、先生方も質問されてお茶を濁すのではなく、意見が分かれる質問についてもしっかりと回答していたことにもとても刺激を受けた。また、どんなに大きな教室でも質問や意見を臆することなく披露する海外の人々をみて、国際的な競争力のためにはこのように自らの意見を、価値観も背景も全く異なる人々にむけて論理的に発表する力が必ず必要になってくるのだと思った。そういった意味では、そのような能力に対する教育がほとんどなされない日本の教育についても疑問をもった。後者の小グループでの授業については私は **European Union** というクラスをとった。ほとんど前知識がなく、参加者にはカリフォルニアの政治家の方などもいらし、彼らとディスカッションをするのはかなりプレッシャーにも感じた。それでもその分自分だけでは深く学べないかもしれない領域について知識が深まりとても勉強になった。具体的にはこのクラスでは最近のギリシャの問題を始め、**EU** が直面する経済的、政治的、社会的な問題がとりあげられた。日本でも経済的な懸念や中国やインドに対する危機感をよく言われているし、薬学部の授業でもたびたび耳にすることがあったが、そういった問題が日本だけでなく他の国においても議論されているということは新鮮な驚きであった。さらにこのクラスについては最後に自分でテーマ設定をしてエッセイを書いた。私は **EU** と日本の経済関係についてをトピックに選んだが、ほとんど予備知識がない分野について本や論文を調べ、一つの意見をまとめるという作業は難しくもあったが達成感は大きかったし、この経験は今後もきっと役に立つのではないかと感じた。実際、これから社会において直面する問題というはおそらくそれまでは予想もしていなかったようなことだろうし、自分の知識がないから諦めるのではなく、積極的に学びとっていくことはとても大切なのだと思った。

HPS のレクチャーともう一つが **global leadership programme** のレクチャーだ。これはよりサイエンスに関する内容を扱い、例えば **stem cell research, aging, climate change, bioethics** など未だ様々な議論がなされている分野について **oxford** をはじめとする大学の先生がいらして下さり、講義をうけたあとでディスカッションをするものだった。こちらは私にとってはより専門分野に近い内容だったので、あらかじめ意見をもっているものも多かったが、たとえば法律や政治を学ぶ学生の質問や意見は切り口がとても新鮮で、自分の考えについても新たな視点から問題を見つめなおす良い機会となった。また、技術的なことにはなるが、学生がパソコンでノートをとり、授業中にスライドなどでグラフや表などでデータが与えられれば関連情報をインターネットで検索したりする姿が頻繁に見られた。私の所属する薬学部をはじめ、日本ではまだそういったパソコンやインターネットの活用方法はあまり浸透していないので、日本はテクノロジーが進んでいる国であるにも関わらず学生がそれを活用できていないという事実にも気づかされた。さらにこの点については、用意された環境という違いも大きく関わっていると思う。他の大学ではジャーナルや論文などへの学外からのアクセスが東大よりも格段によく、指定された記事を自身の大学の検索サービスを通して見つけている学生もとても多かった。私も試そうとしてみたが、東大構内からであればそういった文献へのアクセスはとても良いが、学外からの場合は非常に使いにくいと言わざるをえず、結局他の国の学生がダウンロードした記事ももらうことが多かった。これには単純な技術的な問題以外にも絡む事情があるのかもしれないが、こういったアクセスの違いが学生のモチベーションに大きな差を生むことは明白ではないか。特に日本の大学は寮制度が備わらないという、海外ではほとんど類をみないシステムをもつものだから、学生が大学内にいる時間は海外の大学の学生よりも非常に短いといえる。だからこそ、自宅でも、外出先でも、そして海外にいてさえそれらのリソースにアクセスすることができるというのは、大学が輩出する学生の能

力に多大な影響を及ぼすファクターとなりうるのではないか。東京大学も学生にたいして、「大学の外にいても学生を教育する」という姿勢をそういったシステムで表してほしいと感じてしまった。

クラス外の活動、行事もとても充実していた。大学が主催するものとしては **pub crawl** といってみなでお酒を飲み進行を深める会や、イギリスらしくみなドレスアップして開かれる **formal dinner** や **formal lunch**,そして夕食後のディベートやクイズ大会などが催された。私はこれらのほかにも、友達とダンスに行ったり、週末にスコットランドのエディンバラに **2泊3日** で旅行にいたり、テムズ川でパントリーングをしたり、ピクニックをしたりと机の勉強の他にもたくさんのことを経験できたと思う。そしてなにより私の糧となったと思うものが、友人たちとのディスカッションだ。それは授業中のような堅苦しさはなく、それでいておしゃべりとも違うものである。日本にいてどうしても友人とディスカッションをするというのは軽い気持ちではなかなかないことのように思う。日本人はなにかと境界を引きたがる傾向があるようだ。勉強の時間、遊びの時間、知り合い、見知らぬ人、先生、生徒、先輩、後輩、理系、文系、、と当たり前となっている境界をあげればきりが無い。しかし、その必要性はなんだろうか。線引きをし、テリトリーを決めることは物事をより単純化する意味で役に立つし、考えなくてはならない問題を減らしてくれるだろう。その単純さのために、本来は二元論的に対立するわけではないもの、融合する部分があるものたちに対しても、それを線引き、区別してしまいがちである。この区別は日常生活において抱かれて良いはずの知的好奇心を奪ってしまうという弊害も兼ね備えているように思う。こういった制限の習慣のなさ、友人たちとの気軽でありながら密度の濃いディスカッションを可能にしているように思った。たとえば、自分たちの将来への姿勢であったり、結婚観であったり、授業の延長で科学技術の倫理についてであったり、多様なトピックについてみなそれぞれが熱心な意見を持ち、そしてそれを人と共有することをとても幸せに感じていることが、そのようなディスカッションをとっても楽しく興味深くさせ、そして自分では気づけなかった視点から眺める世界に気づかせてくれたと感じる。

私自身がこのプログラムを通して得たもので一番大きいのはやはり今ではとても深く知り合えわかりあえた世界中からの友達との出会いだ。世界の人々、同じ世代の友人と出逢うことは、世界をより近くに感じることを可能にすると思う。例えば、今回の参加大学のあるデンマークやスイスなどについて、それらの国についてのイメージはこのプログラムに参加する前はあまりはっきりとしたものではなかったし、残念ながら私はシンガポールの公用語が英語になったのがつい最近であることも知らなかった。そして、現在経済の急成長が世界中で認められている中国についても、中国からの学生は、友人とはそれによる利益よりも、悪影響についてのほうがよく議論すると話しており、日本から得られる世界についての情報が、そのように現地の人々と実際に関わって知りうるものの何倍も少なく限られたものであることも思い知った。また、先ほども述べたとおり、国についての危機感を抱いているという点はどの国でも同様であり、先進国について言えば中国やインド、そしてブラジルの台頭に対する緊張感は共通の問題意識であるということもわかった。今回の **oxford** のサマープログラムの目的として“**how to tackle obstacles in the 21st century in the global world**”という問題が掲げられていたが、このように世界を身近に感じるこそがその解決策を議論し、より実行しうる方向性を指すために必須のことであると思った。そして、共通しているのは問題意識だけでなく、「笑い」「楽しさ」もまたそうであることにも感動した。そして私がアメリカの高校での **4年間** を経ただけで形成してしまっていたアメリカに対する、たとえば「リーダーシップをとりたがる」であったり「主張好きが多い」というイメージも、周りの意見をとても尊重する友人などに会うことなどにより少し変わりもした。あることについて

学び、ある程度の経験を積むと固定してしまいがちな意見やものの見方も、常に変化の余地を持っておくことも大切だということに気づいた。どんなに長く勉強しても、その領域を知っているつもりでも、常に驚くべき側面があるということを忘れないようにしたいと思った。

そして、これからの **21** 世紀における **global** な世界では、**nationality** というのはそこまで重要ではないのかもしれないというのも強く感じた。実際このプログラムの最後のプレゼンテーションで、私はパートナーのオーストラリアの女の子とともに、“**Does globalization promote or erode national security?**” という問題について発表した。最後に質問がされ、**nationality** というのは今後意味をもたなくなるのだろうか？というテーマについてもみなで少し議論した。もちろん、所属があるということで人は安心感を得られるかもしれないし、アイデンティティも確立しやすくなるだろうし、人との結びつきも意識するのかもしれない。ただし、今日のように様々な国同士での交流がさかんになり、人々の行き来がより活発になれば、その人が「何人」であるかがどのように定義されるのかという問いに対する答えは一層複雑になるだろう。例えば国籍上は日本人であったとしても、アメリカの教育を受ければ価値観はより「アメリカ人らしく」なるかもしれないし、そういった意味で **nationality** という言葉がさすものは今後どんどんあいまいさを増すのだろう。そのような社会、文化のボーダーがどんどんあいまいになる世界において、それではなにがその人にとっての所属になるのかといえば、やはり他でもない「自分自身」そして共同体としての「人間」であろう。自分自身がどう考えるのか、自分自身の信念、意見は何か、確立することはもはや必須のものとなるのだろう。

そして、日本がより良くなるために改善すべきであろう点も、異なる文化を通して見えたように思う。先ほどあげた大学の教育の姿勢、学生の知のリソースへのアクセシビリティにとどまらず、やはりまずは英語力である。**IARU** に参加したヨーロッパの学生、すなわち英語を母国語としない友人に話を聞いてみたところ、英語を学び始める年齢というのは日本と変わらず **12** 歳程度であるそうだ。それにもかかわらず、もちろん彼らの母国語と英語のルーツの近さというアドバンテージはおいておいたとしても、やはり日本人の英語力の低さは顕著であるといえる。私のデンマークの友人は、英語を学び始めた当初から、毎日英語のアニメを見るのが義務づけられていたとっていた。スイスの友人は、英語を学んで **3** 年目くらいには、クラスで例えばある本についてディスカッションするなどの時間ももうけられていたとっていた。やはり日本の英語教育ではコミュニケーションに割かれる絶対的時間が少なすぎるのだと思う。日本人が英語を話せば話せるほど日本を訪れる海外からの人々の人数は増加するだろうし、それによって社会はより活性化するだろう。日本に来たことがあるというアメリカやシンガポールの友人は、日本は楽しいけれど英語を話せる人が少ないので怖い(!)ということも言っていた。日本は魅力的な国であるにもかかわらず、そして英語を **3** 年~**10** 年以上学ぶことがほとんどであるにもかかわらず、英語の問題のせいで海外の人々が日本を訪れるのを敬遠しているとすればそれはやはり寂しいことであるし、日本の国際社会における力にも影響するであろうし、多様性の生まれない日本で知恵やアイデアの可能性は有限なものになってしまうのではないだろうか。さらに、純粋に英語という言語だけの問題に限らず、議論になれていないというのも「英語が話せない」ことを助長しているようにも思う。すなわち、「言うことがない」状態である。もちろん、人々との和を大切にしたり、雰囲気を読み取ったりする日本人の能力というのはやはり誇るべきものであると思う。しかしながら、それだけでは不十分だ。お互いに似たような価値観を共有する多様性の少ない日本では、感覚で話せば十分に意味が通じることが多いかもしれないが、異なるバックグラウンドをもつ人々に発信するにはそれでは納得させることができない。議論する能力というのは、高校までにその基礎ができ、大学で発展すべきものと考えているが、受身の授業の多い日本の大学で議論能力が十分に鍛

錬される機会はあまり恵まれたものではない。半年に一回の、そして常に答えの用意された問題に対する試験、レポートというもののみが学生の評価基準であり、実際にどのような問題意識を自分もつのか、その根本的な原因はどこにあるのか、そしてそれを解決するにはどうすればいいのかという問題に対して考え、解決策を自分なりに見出す、そしてそのために知識を蓄積させること、さらにそこにいたるまでの論理を評価されるということが日本の大学の学生にはほとんどない。評価をされなければそれを重要と認識することは難しく、どうしてもさぼりがちになってしまうのは避けられないことであろう。「自分で勉強しろ」が口癖の日本の大学教育は教育を放棄しているようにも感じる。自分で勉強することができるのは本にある知識の習得においてのみではないだろうか。英語を話すこともそうだが、意見を建設する際の論理はいくら自分で考えても新しいアイデアが与えられなければ成長しないし、他者との議論なくしては深みをもつことはできない。残念ながら大学で試験やレポートが返却されることはまずないし、自分がどうしてその成績をもらったのか、どこが評価され、どこが改善すべきだったのか、知ることも許されず場合によって異論を唱えることも許されない。そして、評価がいまいなことで、学生が、大学において注意を向けられた存在であると感じることも少なくなってしまう。このような状況では大学での学生の成長はとても限られたものになってしまう。また、日本の大学で科目数は驚くほど多いが、それらはほとんどが週に1回、1科目につき計13回しかなく、次の講義までには前の講義の内容を忘れてしまっても仕方ない状況にある。その中でその場しのぎやテスト対策のためだけでなく、安定し定着した知識が身につく自分のものとなるには到底思えない。安定した知識が増えない以上、考え方の枠組みも増えない。今回参加した国々の学生の話では、授業の種類は5種類程度である一方で、週3回以上同じ授業があり、そのうち1回は小さいグループでのディスカッションのために割り当てられているようだ。これを経て議論の能力をあげるといふことであつた。これについて、東大はどう感じるのだろうか。大学の教育については、まだまだ国際レベルに達していないといわざるを得ないと思う。

今回の IARU GSP に参加し、oxford での1ヶ月間は知的に刺激的であり、新たな知識を習得することができ、そしてそれ以上に日本にいたるだけでは決して知ることのできない社会、視点、世界を見ることができたと思う。また、日本において解決すべき新たな問題意識ももつことができた。この1ヶ月間は期待以上に濃密なものだったが、やはりそれを形成してくれたのは世界中からやってくるモチベーションにあふれた学生たちのおかげであつたと思う。このプログラムは東大ではあまり広報活動が広くなされていないように思うが、これからこのプログラムをより広めてほしいし、より多くの人々にぜひこの機会を勧めたい。この現状はオーストラリア以外の国では同様であるようだった。オーストラリアではこのプログラムには100をこえる応募者が殺到するそうだ。特に日本では留学生も少なく、homogeneous な大学、そして社会であるため、このような機会を通して、それまで自分にとって常識であつたもの、みえていなかったものが他者を通じて覆され、浮き彫りになってくるすばらしい機会なのではないかと思う。そして、そういった個々人の小さな発見や気づきの積み重ねが、21世紀における諸問題への解決策の糸口へとなるのではないだろうか。

プログラムの最後に学生からこのプログラムへのフィードバックをするセッションがあつたが、その時、この IARU の参加者のうちの一人がこういった。“This was the best academic experience ever.” 全員が賛同した。そして、いうまでもなく、“This was the best globally social experience ever.” でもあつた。美しい oxford の街に降り立ち、期待と不安の入り混じる中このプログラムが始まったが、1ヶ月後、親友となった友人と別れるのが辛く涙が止まらなかった。私にとってこの夏の oxford での経

験は、知識を得るためだけの勉強からは決して得ることのできなかつた財産であると今確信するばかりである。